

国

民の間に政治不信が募っている。特に既成政党への不信が強い。ただし既成政党への不信は今年に始まったことではない。2009年の政権交代もある意味ではそうだった。つまり自民党が長期にわたり与党であり続けたことに対する不信が、民主党の大勝をもたらした。

しかし、1年後の参議院選挙では、与党になった民主党への不信が早くも高まり、与党が参議院で過半数を失う結果となった。国民の総意の結果として「衆参ねじれ」状態になったが、これが「決められない政治」を助長するという皮肉な帰結をもたらした。社会保障・税一体改革を進めるべく3党合意にこぎ着けた野田内閣に対しては、自公政権では

できなかった消費増税を決めたと評価する声がある一方で、消費増税は09年の衆議院選挙時のマニフェストで示されていなかったとして強い批判がある。

既成政党への不信は単に国民の声に十分に届いていないことが真因ではない。むしろ、政策の首尾一貫性のなさ、朝令暮改が不信の真因と見るべきだろう。民主党の分裂には、政党内で意思統一が十分でなかったことが象徴的に表れていた。国民はころころ変わる政策を打ち出す政党より、一貫した姿勢のある政党を求めているのではないか。目下高まっている新しい政治勢力への期待を見てもそれがうかがえる。

どんな政策を志向するのか、その

首尾一貫性のなさは、政府の規模をめぐるスタンスにも表れている。単純化していえば、「大きな政府」を志向するのか、「小さな政府」を志向するのかについて、民主党だけでなく自民党でも意思統一がなされていない。与野党を問わず、社会保障の充実には熱心だが増税には反対する姿勢を示す政治家が多すぎる。それが可能ならよいが、結局、うまくゆかず、朝令暮改に陥るのはこれまでに何度も見た光景だ。

これからの日本の政治において、各政党が政策の本身、その志向性を純化し首尾一貫させることが必要である。そして、国民はそうした政党には支持を与え、あいまいな態度を取る政党は支持しないことである。

そうすることで、民間や市場を重視し社会保障給付をできるだけ抑制して増税はできるだけ避けるといって、「小さな政府」を志向する政党と、政府の能力を信じて多少の負担増となっても社会保障の充実や格差是正を進めるといって、「大きな政府」を志向する政党に大別される状況にいずれ収束しよう。

国民の側も覚悟が求められる。国民の声にこたえられる政治家がどこからともなく突然現れ、何の負担もなく国民全員を助けてくれる、といったことはありえない。また、政策を明確にする政治家は、当然ながら賛否両論を引き起こすから、誰からも好かれるということはない。

だから、有権者が望みを託せる政治家を欲するならば、毎回の投票で国民が投票し根気強く育ててゆくしかない。今期待できる政治家がいないうって、政治に失望してはならない。政治家は救世主的に現れるものではないし、一朝一夕に政治的経験を積めるものでもないのだから。

国民に政治家を育てるつもりがあれば、負担増なしで給付増もできるというおおよそ実行可能性が低い政策をマニフェストで示す政党があっても排除できる。そうした政党は国民によって淘汰されるはずである。

国民が「政治家」を育てるとき

【今週の眼】

土居丈朗

慶応義塾大学経済学部教授

経済を 見る眼



どい・たけろう ●1993年大阪大経済学部卒。99年東京大で経済学博士号取得。慶応大専任講師を経て2009年から現職。審議会委員等の役職を歴任。著書は『地方債改革の経済学』『アリとキリギリスの日本経済入門』など多数。専門は財政学、公共経済学。

撮影：尾形文繁